

氏名(本籍)	栗島浩一(東京都)
学位の種類	博士(医学)
学位記番号	博乙第1797号
学位授与年月日	平成14年2月28日
学位授与の要件	学位規則第4条第2項該当
審査研究科	人間総合科学研究科
学位論文題目	年齢および合併疾患からみた肺癌症例に関する臨床的研究
主査	筑波大学教授 医学博士 田中直見
副査	筑波大学教授 医学博士 大塚藤男
副査	筑波大学助教授 医学博士 鬼塚正孝
副査	筑波大学修士 理学修士 高橋秀人

論文の内容の要旨

(目的)

原発性肺癌の多くは、壮年移行の年齢層に発症し、その平均年齢は60歳の半ばとされるが、40歳以下の若年者や80歳以上の超高齢者での肺癌症例もみられ、それぞれ異なる臨床的な特徴を有しているものと考えられる。また、他の疾患、特に加齢に伴う疾患や生活習慣病と称される疾患を合併する例が多数存在し、実際の日常診療の場において治療に難渋することが非常に多い。しかし、これらの症例は、均質な症例を限定するために数々の除外基準が設けられる臨床試験の対象からは除外されることが多く、その診療の実際の臨床疫学的に評価されることは少ない。実際の診療レベルの観点から、それぞれの年齢層や加齢に伴う疾患を合併した肺癌症例について、その特徴と現況を調査、検討し、今後の肺癌診療に資することを目的とした。

(対象と方法)

筑波大学附属病院開院から現在までに呼吸器内科にて診断された肺癌症例全例を対象として、それぞれの年齢層において、症例の特徴、施行された診療について、その記録を調査、検討した。次に、数ある加齢に伴う合併疾患の中で、合併頻度が高く、かつ臨床的に重要な疾患であると考えられる「閉塞性肺炎疾患」、「悪性疾患合併」、「心、脳血管疾患」、「糖尿病」合併肺癌症例について調査、検討した。

(結果と考察)

年齢からみた肺癌症例に関する検討については、

- 1) 80歳以上の高齢者では、全身状態の比較的不良な例や加齢に伴うと考えられる合併疾患を有する例が少なくなかった。比較的侵襲の少ない治療法が選択される傾向があった。また、大多数で対症療法ないし放射線療法が選択されていたが、対症療法が選択された症例と放射線療法が選択された症例の生存期間に差はみられなかった。
- 2) 40歳以下の若年者では、腺癌の占める割合が高く、女性の占める割合が高い傾向があった。診断時、進行例の割合が高かったが、若年者であること自体は有意な予後因子でなかった。
- 3) 40歳代、50歳代の中壮年者は、高齢者肺癌の特徴を有する例と若年者肺癌の特徴を有する例の二つのグルー

プの混合した症例より構成されており、その分岐年齢は概ね50歳前後であった。

また、合併疾患からみた肺癌症例に関する検討については、

- 1) 「閉塞性肺疾患合併」, 「悪性疾患合併」, 「心, 脳血管疾患合併」, 「糖尿病合併」肺癌症例はそれぞれ全体の7.6%, 7.8%, 26.3%, 9.2%であった。
- 2) 閉塞性肺疾患合併例は、病期の進行の割に侵襲の少ない治療法が選択される傾向があり、閉塞性肺疾患合併は肺癌の予後不良因子であった。
- 3) 心, 脳血管系疾患合併は非小細胞肺癌において予後不良因子であった。
- 4) 異時性の悪性疾患合併は、非小細胞肺癌で有意な予後不良因子であった。
- 5) 糖尿病合併は肺癌の予後に影響を及ぼす因子ではなかった。

という結果が得られた。

現在の肺癌診療は、手術療法にて高率に根治が見込める全身状態良好な早期肺癌以外、その治療成績は満足の得られるものではない。しかし、肺癌の大多数は進行癌で発見され、高齢や合併疾患により全身状態良好とはいえない症例も多く、それぞれの施設にてさまざまなアプローチがされており、世界的に広く認知された標準治療は未だ確立されていないといえる。多くの場合、生活の質を保ちつつ生存期間を延長させることが可能な姑息的治療を選択されているのが現状である。我が国においては今後も肺癌患者の、特に高齢者における増加が予想されており、したがって加齢に伴う疾患を合併した症例の増加も十分に予想される。これらの中には、通常の臨床試験においては除外されるであろう症例が多く含まれており、このような肺癌症例においても有効であると考えられる治療法の確立が望まれる。除外基準が設けられる臨床研究という立場からの報告ではなく、「日常の診療」レベルに立った本検討を通して幾つかの知見が得られ、それらの知見を今後の診療成績の向上に役立てていきたい。

審 査 の 結 果 の 要 旨

肺癌は1998年以降、部位別死因順位での第1位となり、特に高齢者層においてさらに増加していくことが予想されている。高齢者では全身状態不良や生活習慣に伴う合併症を有していることが多く、そのような症例においても恩恵を受けられる治療の確立のために、その臨床的特徴を検討することは重要である。本研究はretrospectiveな検討ではあるが、通常の臨床試験からは除外されることが多い高齢者や生活習慣に伴う合併症を有した肺癌症例について、その臨床病理学的特徴を検討したものである。また、年齢層からみた検討にあたり、比較的まれとされる若年者肺癌、あまり過去にも検討されることがない中壮年者肺癌についての検討も加えられている。実際の診療において、現在、標準的であるとされる治療を施行し得ない症例が多く、それが少なからず予後に影響していることが示唆された。本検討によって得られた知見が、今後の肺癌診療の成績向上に活かされていくことを期待する。

よって、著者は博士(医学)の学位を受けるに十分な資格を有するものと認める。